



河馬の夢

清水義範

河馬の夢
清水義範



傑作小説 ^{かば}河馬の夢

平成 2 年 12 月 20 日 初版第 1 刷発行

著 者 ^し清 ^{みず}水 ^{よし}義 ^{のり}範

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所 ^{しやう}祥 ^{でん}伝 ^{しゃ}社

〒 101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5

九段尚学ビル

☎ 03 (265) 2081 (営業)

☎ 03 (265) 2080 (編集)

印 刷 堀 内 印 刷

製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan.

ISBN4-396-63019-0 C0093

© Yoshinori Shimizu, 1990

河馬の夢

目次

世界の国からこんにちは

7

こだま電話相談室

41

帰国子女京都観光ガイド

73

急がば回れ

97

読者のお便り^{たよ}

123

大胆不敵東京案内

153

アホダう教

185

河馬^{かば}の夢

217

あとがき

248

装幀・中原達治
装画・浅賀行雄

世界の国からこんにちは

ワールド・クイズ・'89

“世界の国からこんにちは” スタンガ共和国取材分。 74・01・12

そう乱暴な文字が書き込まれた白い紙が三秒ほど映って、一瞬画像が乱れ、すぐに、若い女の全身像が映し出される。

「はい。まず私は、スタンガ共和国の首都、ベレスバーレンへやって来ました。この場所
は、ベレスバーレンの中心街、トトカルチョ地区です」

ひどくゴミゴミしたスラム街のような光景が映る。道行く人の服装はみすぼらしく、何を
するでもなく軒下^{のきした}にうずくまっているような人間もいる。しかし、その女はやけに元気

よく、周囲を無視して喋りまくるのだった。

「ご覧ください。たいへん活気に満ちた、若々しい街です。ここは日本で言うところ、ちょうど原宿の竹下通りのようなところなんです」

マイクを片手に持った女が、街をうろつく。カメラがその姿を追う。やがて、薄汚い、どうも床屋らしいとおぼしき店の前へ来る。

「わあ。ここは、床屋さんのようですね。わあ、日本と同じだ。床屋さんの椅子がある」
だが、その椅子は籐製である。

「ちょっと入って話を聞いてみましょう。こんにちはー。ちょっとお邪魔します」

客の頭に取り掛かっていた主人が、驚いたようにカメラを見る。

「タラマーチャ。タラマーチャ。ちょっと失礼します」

「タラマーチャ・ナサル」

「タラマーチャ・ポンポン」

主人は、当惑したような顔をしている。

「はい、お仕事中すみません。わっ、ちょうど今、お客さんの頭を散髪していたところなんです。わあ、見てください、これ。こういうハサミで髪を刈るんですね。面白ーい」
女は無遠慮にのぞき込んだり、主人を突ついたりする。

「えっ。はい。えーと、この地方ではある面白いことを、散髪の時にするんだということを、通訳のナセルさんが言っているんですが、どうするんでしょう。おじさん、やってみて。セツテメンカ。セツテメンカ」

床屋の主人、カメラに向かってニカッと笑ったと思うと、いきなり、ハサミを持っていないほうの左手で、客の頭をびたん、とはりたおす。

「うわーっ。信じられなーい。みなさん見ましたか。どうしてなのー」

女は目をまん丸にして、やたら騒ぎたてる。

床屋の主人、また客の頭をひっぱたく。

「ぎゃはーっ。面白ーい」

客は文句も言わずじっと坐っている。もう一発びたん。

「ぎゃはははははは。この国の床屋さんはみんなこうやって、お客の頭を叩くんですか」
通訳らしき痩せた原地の男が、何かを喋っている。

「この国ではみんなこうやっているんですって。こうやって叩いたほうが、頭が芯まで柔らかくなって、髪を刈りやすいからだと言うんですけど、ぎゃはは、ちょっと信じられませんねえ」

またしても、びたん。

「うわっ。面白そーお。ちょっといいですか。私にもやらせてもらえませんか？」

女は床屋の主人に、私にも客の頭をはりたおさせてくれと手振りで頼む。うすら笑って、やってみろという態度をする主人。

「私もやってみますね。わっ、わっ。いいのかな。怒らないでね。いきますよ」

女が客の頭を力まかせにひっぱたく。客の頭がグラッと揺れる。

「わわわっ。ごめんなさーい。ちょっと強くやりすぎちゃったかしら」

客が顔をしかめているアップ。目には薄く涙がにじんでいる。

「タラマーチャ。タラマーチャ。ごめんなさいね」

床屋の主人、へらへら笑っている。

女はカメラの方に向き直って、やおら大声を張り上げる。

「さて、このベレスパーレンの床屋さんでは、お客の頭をひっぱたくのとは別に、もうひとつ、非常に珍しいことをサービスとしてしてくれるのです。はい。そこで問題です。ベレスパーレンの床屋がお客にしてくれる、珍しいサービスとはいったいどんなことでしょう」

女が片手を上げて床屋の主人を指す。主人がにんまりと笑ったところでストップ・モーシヨン。

ビデオ画像がとぎれ、画面が乱れる。

2

「よし。面白えじゃねえか。こんなもんでいいだろう」

と言ったのは、チーフ・プロデューサーの畠山はたけやまだった。

ADの中野なかのが、ビデオ・テープの送行を止める。

「あの、頭はりたおしは受けるぜ。もう勝ったも同然」

ディレクターの斎藤さいどうが、へらへら笑いながらそう言った。

「かなりの迫力だもんなあ。そんでまた、えり子が本気で殴りやがってよ」

サブ・ディレクターの免田めんたが、笑いながらそう言った。

「そこが、えり子のいいところよ。あいつ、言われりやどんなことでも本当だと信じて、何でもやるもんなあ」

斎藤が、そう言った。

スタンガ共和国の、国営テレビ局のスタジオのひとつに彼らはいる。そこを借りて、これまで収録分の映像をチェックしているとこらなのだ。

「やっぱりあれ、えり子は本当だと信じているのか」

畠山が、あきれたように言った。

「もちろんすよ。えり子が何でも本当だと信じ込んでくれるせいで、リアリティある絵が撮れるんすから」

「しかし、床屋が客の頭をひっぱたくわけねえじゃねえか、どう考えたって」

「外国には珍しい風習があるんだ、と思ってるんすよ、あいっは」

「おいしい女だよなあ、えり子は」

「あの、えり子が殴って客が、きいたーっ、って顔してるところあるでしょう。あそこにテロップ入れたらどうでしょうか。あまりの痛さに涙ぐむ客、とか」

A Dの中野が、そう発言した。

「おっ、それいいわ。いただき。中野オ。お前もいいこと言うようになったじゃねえか」
斎藤が褒める。畠山が尋ねる。

「ところでよ、この答えは何なんだ」

「え」

「答えだよ。床屋がしてくれるもうひとつの珍しいサービスって何なんだよ」

「あ、それですか。それは、爪に火をともし、です」

「なに？」

「爪に火をともしんです。もう撮影もすんです」

「どうやって爪に火をともしんだ」

「だから、客の手の爪の上に固型燃料を乗つけて、それを燃やすんです」

「うわーっ。熱そう。それお前、どうしてそんなことするのかってこと、考えてあんだろ
うな」

「もちろんすよ。この国では、爪が伸びるのは心の中の悪魔が邪惡の企み^{たくらみ}をしようとして
いるからだと言じられていて、悪魔を追い払うために、爪に火をともし」

「どうしてそれを床屋がやるんだよ」

「床屋というのは、この国では祈禱師^{きとうし}も兼ねている」

「うわーっ。斎藤ちゃんならではの力業^{ちからわざ}」

大袈裟^{おおげさ}に叫んでいるが、本当はそう驚いているふうでもない畠山。

「でも、そのくらいやらないと面白くないすから」

「それはそうだな。たとえば、ベレスパーレンの中心街を本当に撮影したって面白くも
なんともねえわ。オフィス・ビルが立ち並ぶだけだもんな。そんな絵なら、丸の内の
オフィス街でも撮れるんだ。あのスラム街を、ベレスパーレンの竹下通りにしてしまおう。